

## 第6節 大府市若者会議

(愛知県大府市)

嶋田博子 (京都大学公共政策大学院 教授)

日時：2023年9月30日(土) 9:00~14:15

先方：健康未来部子ども未来課 川出陽一課長、鈴木桂子係長、伊藤太祐主任

担当：嶋田博子、櫻田順一 (自治研修協会事務局長)

大府市では担当課からの聴取に先立ち、2023年度若者会議政策提言発表会の傍聴、会議メンバーとの意見交換の機会をいただいた。ご多忙の最中にもかかわらず、手厚い配慮をしてくださった関係者の皆様に心よりお礼を申し上げます。

### 1. 大府市の概要

大府市(おおぶし)は、名古屋・知多・三河を結ぶ交通の要衝で、JR東海道線で名古屋駅まで約15分という立地や高速道路網の整備による高い利便性と豊かな自然環境が魅力である。



明治39年に7ヵ村が合併して大府村となり、現在の市域が確定。大正4年町制を試行。昭和45年9月、愛知県内24番目の市として市制を施行した。

「WHO 世界健康都市連合」に加盟するなど「健康都市」の実現を推進。産業面では、良好な交通網を活かし、自動車関連のものづくり

り産業を中心に愛知県内でも有力な工業都市に発展。一方、豊かな自然や気候風土にも恵まれ年々人口は増加、「産業と住環境の調和した都市」として成長を続けている。

<大府市の基礎データ>

面積 33.66 km<sup>2</sup>

2020 (令和2) 年国勢調査人口 93,123 人

2021 (令和3) 年度決算 (普通会計) 歳出総額 36,818 百万円

2021 (令和3) 年度財政力指数 1.15

(市勢要覧2021、市雇用対策協議会HP等による)

## 2. 活動概要（担当課からのヒアリング）

### （1）若者会議設置の経緯

従来から、年齢が高い層からは市として意見を聞く機会があるが、若者との接点は少なく声が届きにくいことについて組織内で議論があった。このため、令和2年に市制50周年の区切りを迎えるにあたり、市内在住の高校・大学生による若者事業を進めることとしたが、新型コロナ禍の影響で、実際の開始は2022（令和4）年度となった。ただ、令和2年度は市外にいる大府出身の大学生などを励ますために「学生応援！ふるさと便おおぶ」を、令和3年度は若者駅前プロジェクトとして大府駅前イルミネーションを実施しており、それらもレガシーとしている。

若者施策は子育て支援等と並んで岡村市長のマニフェストの柱の一つであったこともあり、設置に向けては市長のイニシアチブの下に鯖江市や新城市などを参考に検討を進めた。市の置かれている状況が異なるため、直接の参考にするのは難しいと考え、下記（3）で述べるような方策を取ることとした。

### （2）設置目的

- ・ 若者の主体的な活動を支援し、自己肯定感、自己有用感を育むこと
- ・ 若い世代の柔軟な発想と創意工夫を生かし、市が抱える課題の解決や事業促進を図ること
- ・ 活動を通じ、若者が大府市やまちづくりに関心をもち、今後のまちづくりの担い手になるきっかけとすること
- ・ 若者同士の交流を促進し、居場所や仲間づくりのきっかけとすること

### （3）実施方式

当初は1泊2日の合宿形式を含む全3回で実施する形なども検討したが、コロナ禍に加え、参加者にも仕事や学業があることを考え、夜の時間帯を基本に実施する形に落ち着いた。令和5年度は5月25日から9月30日までの全8回実施。

若者会議は事業を実現する場ではなく、若者育成のためと位置づけているので、会議自体の予算は取っていないが、政策提言が9月末なので、提言された施策の実施に向けた予算要求が可能となっている。一方で、そのために日程が厳しくなっている面はある。

参加対象は16歳から29歳までの若者（高校生、大学生、勤労者）で、無作為抽出した3000名に応募はがきを送付した（一度送付した者は翌年度以降除外）。結果として、応募のあった11名全員（令和4年度は14名）を会議メンバーとした（うち最終発表会出席者は9名）。

#### (4) 政策提言までの運営

コーディネーターは、市の審議会等で従来から座長などを務めていただいていた愛知県立大学の松宮朝教授にお願いし、今年度も全回出席していただいた(最終回のみオンライン参加)。

初年度は日本ファシリテーター協会所属のファシリテーターにも全回同席してもらったが、今年度は市職員(子ども未来課所属の2名)で対応する形とした。

テーマ設定についても初年度からの変更点がある。令和4年度は大府市の課題やその解決策について、若者会議メンバーからのアイディア出しを中心とした。実際の提言としては駅前の活性化や若者が参加しやすい公民館講座などだった。自由な提言ができることで参加者のモチベーションが高い一方、市として進めたいこととのズレや実効性の乏しさという問題もあった。

今年度は最初から市としての課題を3つ示し、その中から希望に沿って参加者を早い段階から3チーム(ひとづくり、まちの資源、健康づくり)に分け、その枠での提言を求めた(具体的内容は3.で後述)。また、昨年度は市への提言で終わりだったが、今年度は、自分たち自身は何ができるのかという関わり方も含めて議論することを求めた。また、提言の柱自体は会議メンバーに任せたが、夢物語的なものとならないよう、実行性のあるものとするため、施設の確保などといった提言の細部についてはある程度事務局から修正を求めた。その分、参加者には「自分たちが求めている施策とは違う」という感覚も生じたかもしれない。

一長一短あるのでどちらの方式が良いとは一概には言えないが、来年度も今年度と同じ方式を考えている。

#### (5) 取り組みへの評価と今後の課題

概ね順調に進行し、こうした手法は有用だと考えている。これからも引き続き実施していきたいと考えているが、市での毎年の出生数(900人前後)に照らせば、現在の募集方式ではいずれ頭打ちになることも考えなくてはならない。各年度の若者会議で終わりではなく、OB、OGにもその後の会議に出てもらって輪を広げ、若者の間での気軽なコネクションづくり、コミュニティができると良いと考えている。

参加動機については、昨年度の場合、「市役所の仕事に興味がある」という参加者が2名いて、両名とも結果的に採用につながった。そういう気持ちでの参加もあってよいと考える。

課題としては、7回の会合で政策提言発表資料作成まで行わなければならないことに加え、定例会議以外にも彼らが集まって作業しないといけない機会も多く、負担になっているところがある。また、会議中盤からはパワーポイントによる発表資料作成に移行していくので、若者たちの学びの場となる機会が少なく

なっているのも課題だと思っている。作業の負担感に加え、参加者間の温度差の問題もあったし、参加者から事務局に対し、勤務時間外である夜間に多くの相談メールが入ることをどう扱うかという戸惑いもあった。

なお、政策提言に向けて事業案を検討していくにあたり、実際に事業を経験することで実行性のある事業案とするため、今年度参加者には、「公民館で若者向けの料理講座等を行う」という昨年度提言に基づき、企画から講師依頼などの運営面から材料集めなどまでやってもらった。ただ、実際には参加者を集めるのが難しかった上、会議メンバーには（自分たちが提言したわけでもない施策なので）やらされ感が強く、評判がよいとは言えなかった。

これからの展開について、若者と協働して地域問題を解決していく仕組みは拡大していく必要があるが、あくまでも主役は若者であり、自治体は若者の活動を支援する立場を取るべきだと考えている。

### **（6）自治体の役割**

自治体は、若者が主体的に活動し、自己肯定感、自己有用感を育むことができるように支援したり、若者に学びの機会を多く与えたりする役割を果たす必要があると考える。

公共私連携・協働のプラットフォームとしての評価については、若者会議と公民館講座が協働した上記料理講座のように、若者の力を協働やまちづくりに生かしていくことが大切だと考えている。ちなみに、公民館講座とのコラボの第二弾としては、カラーコーディネート講座を企画中である。

## **3. 最終発表回の傍聴内容**

9月30日(土)9時半から11時半までの2時間にわたり、市長、副市長、担当部課長を含む市職員、市議会議員、地元メディアなどの30名前後の参加を得て行われた。

発表は（1）ひとづくりチーム、（2）魅力あるまちの資源チーム、（3）健康づくりチームの3グループで、それぞれの概要を簡単に紹介する。

### **（1）ウチらの時代だ！ウチらで作る！イケイケ大府！～空白の期間をつなぐバトン政策～**

比較的支援が充実している義務教育期間と子育て期間とのほぎまでである19歳から30歳までの間を「空白の期間」ととらえ、「この世代が活躍でき居場所を持てること」「親や友人にも言えない悩みを市で受け止めること」というターゲットを設定した。その具体策として、a.「子ども未来課」を若者が利用しやすくなるよう、NEW☆ジェネ課（新世代課）に名称変更（子どもや子育て世代へ

の支援との好循環)、b. 悩みを持つ若者をゲイバーのママが温かく迎える「ア  
ンタもこれBAR」の設置、c. 若者自らが子ども若者向け情報を届ける広報「お  
ぶフレ」の発行を提言した。



### (2) The Violin City ~Wakamono ha osharena machini sumitaindesu!

愛知県の「住み続けたい自治体ランキング」で大府市は5位と上位であるにもか  
かわらず、4位までの自治体に共通している「人からうらやましがられそう」  
が挙げられていないため、将来的に住もうと考える人を増やすために（市でも既  
にイベント等で重視している）ヴァイオリンを用いておしゃれなイメージづく  
りを目指そうと考えた。「観光都市は目指さない」「(SNSよりも)直接見て、  
聞いて、体験してもらえる方法を基本とする」という方針に基づき、a. ヴァイ  
オリン音楽をバスや公園など市内の様々な場面で流す、b. ヴァイオリンモチ  
ーフのイルミネーション、c. ヴァイオリンに触れる機会を増やすという具体策を  
提言した。



### (3) Colorful Wonderful Obuful! ~未来の高齢者を健康に~

国民の3人に1人が高齢者となる時代が来る中、若い頃の運動不足が将来的  
な健康問題を生じさせることに注目し、未来の大府市の健康の確保という視点

から「若者が（健康を目的とせず）楽しんでスポーツをする」という目標を設定した。

手段として「ウォーキング+α」の「+α」として、a. スイーツ（ブドウ食べ比べやケーキなどのカロリー分の消費）、b. 推し（YouTuber とのコラボ）、c. 夜（桜、河童庭園のお化け）、c. 謎解きなどの事業を提言した。イベント参加状況のリアルタイム発信など若者の発信力に期待する一方、市に対しては、初回イベントの後押し、運営手助け、（単に人気度ではない）評価フィードバック等を期待すると述べた。



各チームの発表後には質疑に続いて担当部課長から各提言の実現に向けたコメントが行われた。締めくくりに、コーディネーターのねぎらいのコメントに続き、岡村市長より、いずれの発表も素晴らしい内容だったと称えた上で、各提言の中には行政にしかできない内容と行政がNPOや民間等を支援・連携できる内容とがあり、担当課と事業化に向けた検討をしていきたいとの講評が行われた。

発表会終了後、若者会議メンバーと立ち話をする機会を得た。メンバーは高校生から社会人まで幅広く、応募動機も、「はがきが来たのでやってみようと思った」「もともとNPO活動に取り組んできたため」「大学でまちづくりや保育などを学んでいるので興味があった」「前回会議に参加した姉から話を聞いていたので」などさまざまだった。

若者会議の実際の進め方に関し、提言の根拠や話を聞くべき団体などについては、「コーディネーターからの示唆が大きかった」「自分たちで調べて具体的に事務局に提案し、アレンジしてもらった」という双方の意見があった。提言についても、前からそこに問題意識を持っていたとするチームと、最初は全く意識がなく、議論するうちに徐々に固まっていたというチームとがあった。

作業量については、最終回が近づくにつれて非常に増大し、夜間に集まるだけ



でなく、帰宅後も参加者間でやりとりすることが多かったという声は共通していた。また、関与度や関心が低い参加者もいるため、結果として特定のメンバーに作業負担が集中したという不満から、「対等なメンバー間では指示はできないので、事務局が中に入って注意してほしい」という要望を述べる参加者もいた。

#### 4. 調査まとめ

政策発表ではプレゼンテーションの完成度が高く、発想の新鮮さやワーディングのセンスは庁内の議論だけでは得難い強みを感じさせた。同時に、ただ感覚的な説明をするわけではなく、具体的提言に至る道筋は根拠に基づき論理的に詰められており、実行可能性への目配りもあった。また、いずれのチームも市に対して一方的に要求を示すだけでなく、自分たち若者が何をすべきかについても具体的な言及があり、当事者意識が明確だった。さらに、最終発表会に市長以下市役所の担当部署幹部が出席し、事業化に向けた具体的なコミットをすることで、若者会議参加者には「事業の一角を担った」という明確な手応えがあったことと思われる。

他方、コンサルティング会社の提案や大学院の課題発表を思わせる高品質のパワーポイントや流暢な説明ぶりには、発表形式を整えるために膨大な準備時間が割かれたことが推測された。事務局による全員への公平な作業割り当ての要望もあったように、「本来は市が行うべき事業計画を無償で発注された」という受け止め方も参加者の一部にあったように感じられた。

市としては、昨年度の振り返りを踏まえて、市側の課題認識や実行可能性に早くから目を向けさせるとともに、提言後の自主的な関わりも促しており、それらの見直しが完成度の高い有用な提言につながった利点があると考えられる。ただ、自分の問題意識の実現に強い期待を抱いて参加した者は、その思いとのズレがフラストレーションとなったかもしれないと感じられた。

事務局も指摘しているように、「有用性のある提言」と「自発的モチベーション」との間にはどうしても二律背反的な面がある。ただ、若者の主体性を発揮させた上で協働関係を作っていくという本来目標に立ち戻ると、今後は完成度の高いプレゼンを自己目的化させず、たとえば数年間を一タームとして、幹部との率直な意見交換の場を定期的に設ける会議形式なども検討する余地があるかも知れない。

とはいえ、政策提言で示された各チームのセンスの良さは、若者の潜在能力を活かす重要性を改めて感じる機会となった。今年度の提言の多くは実行され、若者会議の成果として市内外で広く注目を集めると思われる。市長はじめ幹部の関心度や実現化意欲が高いという好条件の下、これから様々な試みの積み重ねを通じた発展が期待される。